

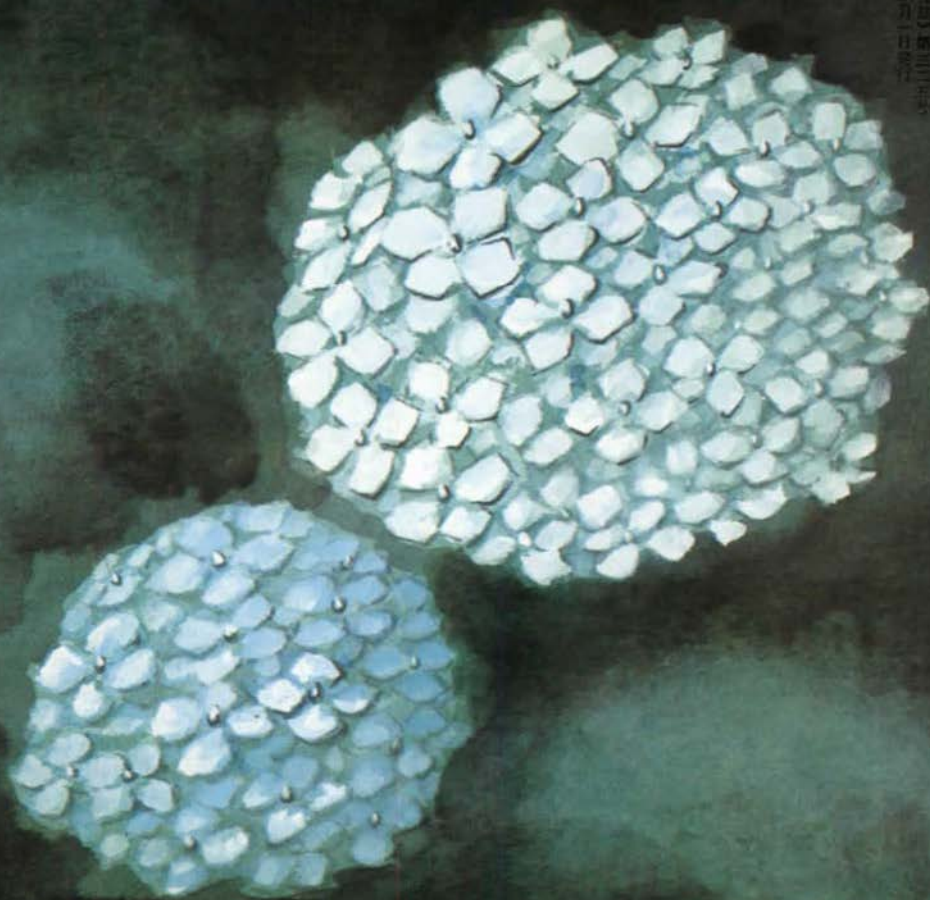
淨土

1977-6

第四十三卷

第六号

昭和二十九年四月二十八日 第三号
昭和五十二年五月二十五日印刷
昭和五十二年五月一日發行
第三十五号



S. K. 2

風雨以時

「うっとうしい」という形容が六月の時節をあらわす言葉になっている。夏至（今年は六月二十一日）を中心とした前後二十日程の雨は、丁度、梅の実の熟するころに降るので梅雨といい、あるいは、梅は黴・霉の音通であるから、黴はかびで、梅雨のころにはものが見な黴を生ずるので黴雨とも書くという。じ

めじめしてかびの生えそうな長雨はまことに不快だし、梅雨の後期にはともすれば集中豪雨に見舞われる心配もある。けれども、この時節に雨がないうと八月には深刻な水不足を招くし、「和風緑野を吹き、梅雨芳田に瀧ぐ」（唐太宗の「詠雨詩」の一節）という梅雨の効果もある。やはりほどよく時を得て雨が降り風が吹く「風雨以時」でないと人間生活のベースが狂ってしまう。

昔のように大自然に随順しようが、現代のように科学の力で大自然の克服を図ろうが、人間はつねに人間の幸せのために人間と自然

とのかかわりを考え、人間を幸せにする自然のありかたをひたすらに願っている。仏典の中にも、もちろんそうした心情が反映している。

ここに掲載した「風雨以時」（山岡鉄舟筆）の書は、『無量寿経』巻下五惡投の、「天下和順し日月清明なり、風雨時を以てして災勸起らず、国豊かに民安んじて兵才用いることなし、徳を崇め仁を興して務めて礼讓を修す」とある中の一句である。今年の梅雨も「風雨以時」であってほしい。

（佐藤成順）



「風雨以時」(山岡鉄舟筆)

六月号



南無阿弥陀仏、往生の業
には念仏を先と為す
——『選訳本願念仏集』

目次

法 話

- | | | |
|---------|---------|------|
| 清 浄 光 | 藤 堂 俊 章 | …(2) |
| 法然上人のこと | 深 貝 慈 孝 | …(6) |

- <人生読本コーナー> 信頼について…………井 上 信 一……(19)
- <ふるさと紀行> 月山と将棋寺…………西 沢 正 臣……(24)

いのちを考える③<病氣>

- | | | |
|-------------------------|---------|-------|
| 病氣といのち | 杉 田 暉 道 | …(10) |
| 八分目の健康体
余裕ある人生を送るために | 井 上 信 光 | …(15) |

- <随想> 心のままに[五]…………川 内 知 光……(30)
- 芭蕉と仏教(二)…………河 野 喜 雄……(32)

<読者の声>時に想う

- 「時の記念日」によせて…………岩 崎 中 生……(28)

<表紙裏・巻頭言> 風雨以時…………佐 藤 成 順

- 念仏ひじり三国志⑧——法然をめぐる人々…………寺 内 大 吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



清 浄 光

とう どう しゅん しょう
藤 堂 俊 章

(和歌山県田辺市竜泉寺隠栖)

ハンカチ

私はよく長い法の旅に出ますので、新しいハンカチと洗濯したハンカチとをいくつか持つて出ます。私に少しケチの根性があるのでしょいか、どうも新しいハンカチを使わずに、洗濯した方をよく使います。それでも新しいハンカチを使うことがあります。お座敷の床の間を背にしてご飯を頂きますような時に、新しいハンカチを使うのです、体裁がいいから。しかし、そんな時にかぎって醬油をボタツとハンカチの上に落すのです。麻のハンカチがじゅつとにじむと身を切られるような思いがいたします。そのハンカチを洗濯いたしますと、もう平気で汗がふけるようになるのです。

なんでも新しいうちは、よこすまいと注意いたします

酒・煙草

が、よこれめがひどくなれば、よこれていることを何んとも思わない、平気でおれるものです。感覚的欲望は慣れると習慣化し、ついには病的状態になります。

一合の酒で酔っていたものが、一合では酔わなくなつて、二合の酒を飲むようになり、二合では酔わなくなつて三合となり、酒なしでは一日も生きられなくなつて習慣化し、ついには病的状態となつて、アルコール中毒となり、自分がアル中になつていることが分らなくなるのです。

煙草も同じで、日に十本の煙草を喫っていたものが、日に二十本となり、二本エンツツから煙がたえまなく出るようになり、ついにはニコチン中毒となつてしまうのであ

ります。

私たちの肌につけているものは、内からと外からと両方からよごれてまいます。内からは汗垢によってよごれ、外からは塵埃によってよごれ、洗濯を必要とするものになります。

私たちの身体には八万四千の毛孔があるといえます。その八万四千の毛孔からたえず分泌される汁垢によって肌につけているものがよごれ、外からは塵や埃がくっついて、いよいよよごれめがひどくなつてまいます。

一番上等の着物に醬油でもこぼしますと大変で、シミをぬくのにとどいたらよいかと大さわぎたしますが、モンペイなんかですと平気です。よこれがひどくなつて慣れてまいますと、よこれていることを何んとも思わなくなつてしまうものであります。

感 覚

それと同じように私たちの感覚も、内からは先天的に宿業によってけがれ、外からは後天的に五塵によってけがれているのであります。あまりにもけがれきついているから、自分の感覚がけがれていることを、何んとも思っていない、平気でおられるだけのことがあります。

先天的には宿世の業により、後天的には五つの塵——眼で色を見、耳で声を聞き、鼻で香をかぎ、舌で味を味わい、身で触れては自分の心がけがれきついているのです。

わがこころ鏡にうつるものなれば

さぞや姿のみにくかるらん

と古人が歌っていますが、けがれた心を映す鏡はありませんが、この心を測定する機械を私が発明したのです。

顔

その心を測定する機械とは、みな自分のもっている「顔」です。顔ほど自分の心を正直にあらわすものはございません。嬉しい心は嬉しい顔となり、悲しい心は悲しみの顔となります。ですから新婚ホヤホヤのものがお悔みにいっても駄目ですし、可愛いお子さんを亡くされたお母さんがどれほど笑顔をおつくりになつても、それはやっぱり泣き顔です。

「顔」——「かほ」は「けほ」という言葉につらなっており、「けほ」を漢字にあてはめると「気表」です。から、「顔」——「かほ」はあなたの気持が表にあらわれたものです。

「顔」のことをまた「おも」といいますが、「おも」とはおもいがおもてにあらわれたものでしょう。百人一首に「しのぶれど色にくりけりわが恋はものやおもうと人の問うまで」とありますように、若い人がどんなに忍んで、かくれて恋愛をしておりますも、人を恋うるおもいが内にあれば、すぐばれてしまいます。もともと日本の皇太子さんは上手におやりになりましたが、庶民はそうはいりません。

けがれの心はけがれの顔となり、清らかな心は清らかな顔となるのは当然であります。今お念仏をとなくて、阿弥陀如来さまの清浄光というお光明によって、私たちの心の塵や埃がそがれてまいりますと、六根清浄という身にならせて頂き、姿・顔色がうるわしい身とならせて頂くのであります。法然上人の御影を拝するたびに、私はいつもその感を深くするものでございます。

W・K嬢

今から十年ほど前、福岡県K町のS寺で五重相伝がつとまり、私お手伝に参上いたしました。その五重受者の中でW・Kというその町の役場につとめているお嬢さんがいらっしやいました。五重の四日目、役場から電話がかかってきて、「用ができ

たから一寸帰ってこい」という。「私は正式に休暇をとっているから帰らん」という。「いやお前がおらんと分らんことがあるから役場へ来い」という。私の所へ相談に来られましたから、役場は公共の機関で一日といえどもゆるがせにはできない、前後いれて二時間、一寸役場へ行つて用をすませてきなさいと私は申しました。

そのお嬢さんが役場で用をすませて、お寺へ帰つてこられ、「いま役場へ行きましたら、上司の課長さんから役場中の人々が、私の顔が変わったといわれた」と私に申されるのであります。四日間みっちり念仏礼拝聞法のそこに、心が清らかなり、その清らかな心が顔の上にあられて、役場中の人々が認める清らかないお顔になったのであります。

波紋

翌年その寺へまたお手伝にまいりますと、ご住職さまが私に、お疲れのところを誠にすみませんが、町役場で十二時から一時間ご講演願えませんかとおっしゃる。このW・K嬢の顔が変わっただけでない、言葉使いが変わり、働きぶりが変わってきた。

いつもニコニコ明るい笑顔

いつもハキハキ優しい言葉
いつもイソイソ働く手足

となった。それが町長以下の認めるところとなり、宗教は大した力のあるものだということで、「役場の職員対象の講演に」といわれる。その時、その町の婦人会会長以下幹部の方もお聞き頂き、翌年は郡婦人会の幹部研修会に招かれて講演にいったことがあります。

たった一人の若い女性が念仏修養によって、顔が変わったばかりでない、言葉使いが変わり、働きぶりが変わったことによって、役場を動かし、郡婦人会を動かす原動力となったのである。静かな池に石を投げこみますと、波紋が岸边へおしよせるような影響力を周囲に持つお互いになりたいと思います。

つつむともおのずと面にあらわれる

慈悲の心にふれしところは

化粧

お化粧の秘訣はぬることよりも、心を美しくし、心を清らかにすることではな

いでしょうか。人は誰では「つくられた顔」と「つくる顔」とを持っている。「つくられた顔」とは親から産んで頂いた先天的な顔であり、その顔がどんなに整ったいい顔であっても、本人の心がけがれ、本人の心が荒んでいると、それはいい顔にはならない。反対に親から産んで頂いた先天的な顔は多少どうあろうとも、本人の心が美しく、本人の心が清らかであると、それはそれなりにいい顔になる。そのように本人の心がけによって、いい顔にも悪い顔にもつくっていく、後天的な「つくる顔」があります。

したがって化粧の秘訣はまづアナタの心を美しく清らかにすることです。その上にお化粧品をおぬりになるとよい。そのためには、しっかりお念仏を申し、阿弥陀如来さまの清浄光によって心の塵垢をそぐいで頂き、姿や顔色をうるわしくして頂くことが必要なのではないでしょうか。

「若きは美わし、されど老いたるは更に美わし」とホイットマンが歌っていますが、若い人より美しいお年寄りになるためには、清浄光によって心の塵垢をそぐいで頂くよう、しっかりと念仏を申そうではありませんか。



法然上人のこと

深^{ふか}貝^{かい}慈^じ孝^{こう}

(仏教大学助教授)

一

梅雨時の六月は、だれにとってもあまり気持のよいものではない。しかし、そぼ降る雨のうっとした中にも、時には穏やかなひと時を過すこともあるが、ただあまりにも世務にふりまわされているのがわれわれ人間である。元祖法然上人の吉水の流れを汲ませていただく一人でありながら、まことに慚愧にたえない日常である。仏前に向って「これでよろしいでしょうか」と、せめておたずねできるまでになりたいと思うけれども、その希いはこのままでは果されそうにはない。

人間恩恵として衆務を営んで、年命の日夜に去ることを覚らず。(『往生礼讃』)

との善導大師のお言葉は、自己生存のために不断の営みをつづけるわれわれに對する警誡である。それが学問であらうと、生活であらうと、政治であらうと、経済であらうと、真実への道、仏道からすれば、すべて衆務以外の何物でもない。

道俗の時衆等よ、各各無上の道心を発すべし。

生死甚だ厭い難く、仏法また欣い難し。共に金剛の志を発して、横に四流を超断すべし。〔觀經疏玄義分〕

とは、正しき道にすすめよ、との心からなる勸説である。この善導大師の喚呼は、單なる『觀經疏』冠頭の辭ではない。五部九卷といわれる大師の御作すべてを表するものであり、眞實の世界に往き生きよ、との精魂こもった誘いの言葉である。しかしながら、生死世務は甚だ厭い難く、眞實仏法はなおさら欣い難し、である。

今の世の宗教心の薄弱さもさることながら、一千三百年以前にすでに善導大師が指摘しておられることは、われわれ人間のもって生れた性の、尋常一様なものでないことを証し明かしておられるかのごとくである。

この原点に立ち、このような人間の性のまにまに、仏の国に往き生きることができるといふ凡夫入報土の教えを説かれたのは法然上人である。まことに法然上人の一向専念の浄土宗義別立は、中国における善導大師の古今楷定浄土教創唱以来の偉業である。

善導大師を頂点に、中国では事実上純粹浄土教は低滞した。その教えは五百年の後、日本において法然上人に

まさしく受け継がれ、見事に布き弘められたのである。法然上人こそ善導浄土教の正統の後継者である。ある夜の上人の夢に善導大師が現れられて、「汝、専修念仏をひろむること貴きがゆへにきたれるなり」〔勸修御伝』第七〕といわれたというが、このことは法然上人と善導大師の深いつながりを表したものだといえよう。

二

一向専念の義をたつるに人おほく誘じていはく、たとひ諸行を修すといふとも、まったく念仏往生のさとりとなるべからず。なんぞあながちに一向専念の義をたつるや、これ偏執の義なりと。かくのごとくの難をいたすは、この宗のいはれを知らざるゆへなり。經には一向専念無量寿仏といひ、釈には一向専称弥陀仏名と判ぜり。經釈をはなれてわたくしに義をたてば、誠にせむるところのがれがたし。この難をいたさんとおもはば、先ず釈尊を誘ひ、次に善導を誘はずべし。そのとがまったくわが身のうへにあらず。〔勸修御伝』第四十)

世の中に毀譽褒貶つねのことであるが、法然上人ほど多くの人に信ぜられまた謗ぜられた方もあるまい。しかしながら、余人の及ばぬ点は、謗ぜられつばなしではなく、必ず相手を屈せしめ、ついには謗りに倍する信を得ておられることである。あたかも諸学匠は敵に打ちあたる波、大力士に対する取的の感がある。『勅修御伝』には、その有様がよく記しとどめられている。

國城寺の長吏、公胤は法然上人を誹謗して、「公胤が見たらん文を法然房の見ぬはありとも、法然房の見たるらん事の、公胤が見ぬはよもあらじ」と自讀して『選択集』を難破したけれども、法然上人は、この人は論議の基本がなっていないとあっさり評価を下しておられる。

公胤は再三の挑戦したが、その都度却けられて、ついには恐れ入って、法然上人を博覧強記とたたえ「たつるところの浄土の法門、聖意に違はずからず、あふぎて信すべし。かの上人の義をそしる、これおほきなるがなり」とまでいうにいたる。公胤は顯密の達者、智行兼ね備わった人である。この大物が手もなく屈して、逆に法然上人を称讃する方に回ったから、上人に対する世の人の信は確固不動のものとなった。

もっともはげしく誹謗したのは梅尾の明恵高弁である。『摧邪輪』を著して『選択集』を難破したが、法然上人の門徒はこぞってこれに反論を加えた。それならばということで、高弁は『莊嚴記』を作って自説を救おうとしたが、義理不相応であったので、いよいよ名譽を落したという。のちには『摧邪輪』を作ったことを大いに後悔したそうである。

論議決択日本第一の譽れがある高野の明遍、事相教相抜群の呼び声高い禪林寺の静遍なども、はじめは法然房何ものぞ、と氣負い込んだけれども、結局は法然上人に服し、師とも仰いで念仏を行としている。

毘沙門堂の明禪は顯密の棟梁、山門の英傑である。はじめは法然上人の念仏興行を大いにそねみ、大いにそして問題にできなかったが、ふとしたきっかけで、上人の高弟法蓮房から『選択集』を贈られ、披閱するに及んで、深く法然上人の専修念仏の勸化を信ずるようになった。明禪ほどの学匠であっても、一遍、二遍はもちろん、四、五遍読むにいたって、ようやく深旨に到り、信を増して疑いが消えた、というのであるから、『選択集』の内容がいかに当時の仏教界の常識を超えていたもので

あったかが想像できるのである。明禅の述懐のことばは次のごとくである。

我朝に浄土をすすめ、念仏をひろむる人おほしといへども、この上人は、信謗ともにつねの人にこえたり。その故をたずぬるに、一向専念のすすめよりをこれり。つねの人の心にたがへば、そしるにいはれあり。つねの人の義にこへたれば信ずるにいはれあり。この義を立せずば、あながちにそしるべからず。あながちに信ずべからず。むかしも今も、この義を立つる人なければ、先たるべくば、人にすぐれたるべし。徳たるべくば、人にすぐれたる徳たるべし。ゆめゆめ普通の義に准ずべからず。ただしこのすすめにしたがひて往生する人、すでに四辺にあまねければ徳とするにたれり。『勅修御伝』第四十一

この文は法然上人の念仏のすすめが世の人に与えた影響の大きさを示し、法然上人の徳風の偉大さを表したものとて名文の部類に入るであろう。門人以外の諸学匠の讃仰がこのようにつくつくといふことは、文字通り、法

然上人が智慧第一の法然房としてあまねく世に聞こえられたことを証するものである。

三

法然上人の教えは善導大師以来の伝統をつがれ、それを開顕せられたものであるが、その一向専念のすすめは、凡入報土を目的とした浄土門の立場においてなされたものである。いわゆる聖道諸宗と肩を並べて、その教義内容の浅深を競おうとされるものではない。あくまでわれわれ凡夫の機根能力にふさわしい教えを選ぶというところにその立場があるのであるから、諸学匠の考えのよく及ぶところではない。しかしながら、それが法然上人ご一人の立義ではなくして、釈尊の付属、善導の釈義によることを堂々と論ぜられたのであるから、いかなる学匠であつてもついには上人に屈服せざるをえないことになつたのである。「そのとがまったくわが身のうへにあらす」との表明はこの自信より出されたものと思われる。これを仰げばいよいよ高く、これを讃ればいよいよ堅し、とはまた法然上人のことをいうのであろうか。

いのちを考える

(三)

— 病 気 —

病 気 と い の ち



すぎ 杉
た 田
き 暉
どう 道

(横浜市立大学助教授・医博)

○
医学とは何であろうか。むずかしい質問であるが、一つの考え方として、医学とは生命現象を自然科学的に研究する学問であるといふことができる。しかし、これは医学の中では生理学といわれる分野についての定義である。

それでは「人間の生命現象を自然科学的に研究する学問である」といったらよいであろうか。これでも医学というイメージがびつたりこない。それは医学は人間の生命現象を自然科学的に研究すると同時に病気の治療を行なう実践の学であるからである。病気の治療を行なうこそ医学といえるのである。

したがって医学は学問の分野からいえば、

自然科学部門に入るが、化学や物理学と同じ部類に入らないのである。

○

さて、医学が扱う生命現象とはどんなものであろうか。筆者は公衆衛生学という部門を専攻しているので、この分野が、どの辺まで解明されているか、明確にはわからないが、核酸という極めて微細な物質の単位の機能が研究されていることは事実である。これは人間ではないが、肺結核を起こす結核菌にも雄と雌が存在することがわかってきた。このように進んできてはいるが、医学で扱う生命現象とは、物質的なものをさしているという点とは今更筆者がいうまでもないであろう。人間の各臓器の生命現象の解明が飛躍的に進んだために、眼の眼球移植、腎臓移植さらに心臓移植も可能になったのである。

ところでここにこれから問題にする「いのち」または「生命」は、生命現象とは異なっ

たもので、どちらかというと精神的なものをさしていると思われる。しかし一般にはこれらをあまり厳密には区別していないようである。実際問題として区別して使えない場合が多い。人間のいのちは、あるいは生命は観念的には精神的なものと物質的なものと分けて考えられるが、人間は両方を一体として持っているものである。したがって本稿でもぎこちなく分けて考えるより、素直な意味のいのちとして述べたい。

病氣といのちと書いて直ちに思い出すのは、『新医療』という医療社会の教養雑誌に掲載されていた死についての記事である。その中で次のような記事があった。それは東京の聖路加病院においては、重症の患者が死期に近ずくと、もう医者は関係しなくなつて、牧師がやってきて患者が精神的に安心して死んでいくように、説教したりお祈りするといふのである。これは重症の患者すべてではなく、希望する者のみに行なっているという。

そしてこの病院には、これを専門に行なうよく訓練された牧師が何人か常駐しているということであった。

筆者はこれを読んで何と立派なことだろうと思った。そしてまた自分に牧師のようなことができるかなあと思うと何とも言えない気持ちになった。いやしくも僧侶という資格を持ちながら、その信仰心というか、信念というか、そういう心構えの弱さをひしひしと感じとったのである。

日本人は仏教を感情的にとりいれたということは多くの人が指摘するところであるが、同じような意味で、いのちというものについても感情的に考えている人が多いのではなからうか。いのちの大切さについても感情的にわかっているに過ぎいなので、今日のように人間疎外の社会になり、ちょっと生活が苦しくなると、簡単に一家心中をするという事態になるのではないかと思う。

現代の医療についてみると、極めて多くの

問題を抱えているが、その根底にあるものは、病人を治療するのではなく、病体を治療しようとしている点にあるといわれる。医療費の中でもっとも大きい割合を占めているものは薬剤費であって、何とこれが全体の三〇—四〇%を示している。またこれからの病気は慢性の病気（脳卒中や、心臓の病気、糖尿病、がんなど）が多くなるので、これらを治すには、食生活や不断の生活の指導が極めて重要になってくる。しかるにこれらの指導料は極めて安い。

さらに目を転じて社会全般についてみると種々な公害病が発生している。日本は世界の公害の先進国というありがたくない汚名をつけられている程である。

これらはすべて、われわれ日本人がいのちの大切さをほんとうに身を以って体得していたならば、もし弊害が起きたとしても現在みにたいにひどくはなかったであろうと思われる。医者も残念ながらその例外ではないので

ある。

○

いのちの大切さを教えるのは、正しく宗教であって、日本では仏教である。してみると今日の精神的荒廃に至った原因をさかのぼってみると、残念ながら仏教の怠慢ということになるのではなからうか。そしてこのままではこの状態がますます進行するのではないかと憂慮されるのである。

日本は精神的文化の風土の底辺がうすいといわれているが、これはとりもなおさず、日本人にはいのちの大切さというものが、しっかりとした風土としてかもし出されていないことを意味すると思う。

それではいのちの大切さをどのようにして把握し、体得したらよいであろうか。先にも述べたが日本人は仏教を感情的にとりいれ、しかしその仏教によって日本人を厭世感の強いものにしてしまったようである。

この点をよく反省し、今日において積極的に生きて行く態度をつくるべく努力しなくてはいけないと思う。死後はいざ知らず、現在の置かれている状態において正しく生活するにはどうしたらよいかということを十分に考えるべきである。

筆者は愛泉ホームという社会福祉施設において、毎日、無料健康相談を、ごく簡単な治療をしながら夕方二時間行なっている。ここにくる患者は、周囲の環境からボーダーラインに属する人が多いが、大学病院で受診している人も時々くる。そこで大学病院で受診している人にどうして、ここへくるのかと尋ねると、この先生は病気についての説明もくわしくしてくれるし、自分達のいうこともよく聞いてくれるからだと答える。それじゃ大学病院の先生に自分の聞きたいことを話すればよいではないかという、なかなか話にくいという。

また中には、自分でいろいろなことを話し

てこれですうとしたと、それだけで喜んで帰っていく人もある。

筆者は病気の治療法を説明するのに、その人の気質、または社会経済的状态をよく聞いて、それを加味しながら行なうようにしている。すなわち大げさにいえば、人間尊重の医療である。

これからの医療は、ほんとにいのちを考え、た全人格な医療が要求されてくることは明白である。

○

最後に、普通二十歳位までしか生きないといわれている進行性筋ジストロフィー症の患者を持った親の、死をめぐる座談会が、『難病患者とともに』という本にのっているので、その一部を紹介して、本テーマのしめくくりしたいと思います。

この座談会は、患児が偶然にも読んでいた雑誌の中で、自分が罹っている病気が十五歳

から二十歳で死んでしまうと書いてあるのを見つけて、かなりのショックを受け、親がこれにどう対応したらよいかわかり、同じ病気を持つ親達に相談するところから始まるのである。

まず患児が読んだ雑誌の取材に応じた親の意見は次のようであった。子供が年齢に達すると、自分が何のために生まれてきたかをどうしても考えるようになる。人に迷惑ばかりかけて、しかもなお生きていかななくてはならない。こんな自分に生きていく価値があるだろうかと思ふ。そこで親は「お前のような病気を持った子どもでも、立派に生きる価値がある。人間の値うちというものは、与えられた条件の中で自分をどうやって生かしてきたかにあるんだよ」と勇気づけてきたのである。このような時に取材にきたのである。子どもにとっては、それに応ずることが、精一杯生きている自分を主張するチャンスでもあるわけである。こうして取材に応じたという

のである。また今の状態では二十歳までしか生きられないとわかると、がむしゃらに勉強をはじめて、それが今も続いているという。この親はクリスチャンである。

またある親は、この問題について身体障害児の教育に熱心な先生に相談したところ「死

八分目の健康体

——余裕ある人生を送るために

つぎつぎに襲ってくる不安に、医者はいとも簡単に、

「もっと自分の症状を客観視なさい、あなたがいちばん重い病気に思っているのはあり

ぬまぎわまで希望をもたせなさい。絶体に活きるんだということを最後まで信じて疑ってはいけない」といわれ、これを参考にし、宗教の道で解決を得、今もその親の子どもは普通の学校に通っているという。



いのち
うえのぶ
信光
(作家)

ません。上を見ればキリがないと同様に、下を見てもこれまたキリがなく、もっと悲惨な、不治の病人もたくさんいますよ。それに比べれば、自分の症状をあこれ考えることのできる余裕をもっているあなたはぜいたく

ですよ」

と、励ましてくれた。

たしかに、第三者からみれば何とでもいい得ようが、患っている本人にとっては、それはいいようのない日々の連続である。それまでの健康体が、まったく虚仮であったとしか考えられない。すべてに自信をなくした弱い人間が、そこにいるのである。

昭和四十八年正月九日、朝のうちから頭痛があり、一向にとれない。夕方、早目に職場を辞し帰路につく。すでに混みはじめている電車。目まい、そして立ちくらみに悩まされる。それでも、なんとか我慢し家に辿り着いた。寝るのがいちばんと、布団にもぐりこんだ。ウトウトとする間もなく、まず見ることはない夢を見たのである。それも、たいへん恐しい夢だった。頭がガンガンし、大きな不

協和音が聞えてきたところで眼が醒め、われにかえた。ひどい耳鳴りだ。不協和音は、この耳鳴りの所為だったのであろう。不安がよぎる。再びねむりにはつけない。時計を見る。午前一時であった。早く夜明けが来ることを祈るのみであった。

翌朝、症状は顔面の左側すべてが麻痺するところまで進んでいた。しかし、気になるのは耳鳴りであった。そこでとりあえず、耳鼻科の診察を受けることにした。診断の結果、ウィルスが顔面左側の三叉神経を刺激し、そのために麻痺と耳鳴りの症状を併発したのだという。病名はハント氏症候群という、あまり聞きなれないものであった。

この日から三カ月間、職場を離れることを余儀なくされた。耳鳴りがとれるまで約一カ月半、麻痺のほうは二カ月半ほど続いた。この間、午前中は通院し、注射と電気機具によるマッサージに費された。そして、二カ月目頃より投薬による副作用が胃から出始め、大

袈裟に言えば五臓六腑、すべてに及んだのであった。このため、投薬は一時とりやめ、自然の回復を待つより仕方ないということになってしまった。

それでも、病いになれた身体というのか、表面的な症状がとれた頃より、以前の自分にかえり、三カ月間の遅れを取りもどせとばかりに働き出した。しかし、身体は以前のものではなかった。根気が続かず、すぐに疲れてくるし、顔左半面が痺れてくるのであった。医者の言によると、この痺れの自覚症状は、そのときどきの身体の状態により多少の変化はあるが、多分一生とれない、疲れてくればかならず出るということであった。

すでに発病より四カ年経たが、今、この稿を書いているときも、ジキル博士とハイド氏の二面性をもつ顔ではないが、左右の顔の感覚は微妙な変化を示し、たとえばような心持である。

往時の健康体が、とてもなつかしい。しかし、背負わされた持病のある身体も、考えようによってはとても貴重であることに気づかされた。それはまさしく「いま現にここに生きている」、「いのちここにある」ということである。たわいのないこと、当然のことといわれるかもしれないが、幾たびか挫折しそうになりながらも、「生きる」ことへの執着を、身をもって経験したすえの答であるからだ。

この貴重な体験は、こののちの仕事のほかすべての日常生活のなかで生かされている。平生は思いもよらぬことであるが、何か窮地に追い込まれたとき、それをわねかえすだけの力があるか否かによって、その答はおのずから決ってくる。「生きぬく」という力があれば、たとえその時は不調に終わったとしても、最終的な結論はよいものになると確信できるからだ。

だが、一方にはいつまた襲われるかしのない、という弱気な自分が内在することも事実だ。また思ったらどうしよう、今度こそダメだろうと考え込んでしまう。この精神的弱さが出ると、もう雪崩のようにとどまるところを知らない。悪いほうへ、悪いほうへと考えが及んでいく。この場合、「いや、そんなことはないよ」という否定の気持をもったとしても、一度思い込んだ弱い気持のほうか、はるかに強いものである。人間の「生きる」とこへのある種の弱さを、改めて知らされる思いがしてならない。

「病いは氣から」とは、いい得て妙なる名言である。気持のもちようひとつで快方にもむかうし、反対により悪くすることにもなる。しかし、一度弱みをもった人間は、なかなか立ち直ることができにくいものである。健康体と病的な身体が同居し、葛藤しつづける。その仲裁役が自身の心持であるが、この三者入り乱れての戦いがつづく。ともに一身の中に

あるものの戦いだけに結論は出しにくい。すべてのものに勝る精神的な強さ、そして余裕があればことは簡単であるが、生身であるが故に名解答はできないであろう。

体験を通して感じとった、わたしなりの結論を急ごう。最近になって、最初に掲げた医者言「自分の症状を客観視する」、これに尽きるところになってきた。満身創痍とはいかないまでも、生きている限り完全な体調はあり得ない。どこかしら不調なのがあたり前である。

そこで、「八分目の健康体」こそベストの体調であると考えることによって、精神的な余裕がもてるような気がしてならない。そう思うことによって、いざという時の心の準備もできるようにも思える。

このうち、「いのち」ある限り、病いと同居し、それにうち勝ちながらの人生を続けたと思うこの頃である。



信頼について

いの うえ しん いち
井上 信 一

(宮崎銀行頭取)

(一)

今から数年前、高度成長がはなやかな時代のことと聞いておりますが、あるPTAで男の先生がお母様方を対象にひとつのアンケートを取られました。このアンケートの内容は、昔から法律の例題としてよく使われるギリシャの話で——あるところで、親子三人が船旅をしていた時、その船が難波してしまいました。そしてこの三人が海に浮かぶことになり、なんとか救おうとしたところ、

丁度ひとつの木切れが浮いていました。ところが木切れに三人がつかまると沈んでしまう、二人ならなんとか助かるという——、この話をもとにして先生がアンケートを求めたところ、なんと一番多かったのは、「旦那様、お沈み下さい」というものだったそうです。男の先生としては非常にショックを受けたということでした。これは戦後、我々が経済的な幸せを手に入れようとして、世界随一の発展を遂げてきたのですが、この結果としていざとなれば、今のような最愛の旦那様でも犠牲に

してしまおうという姿勢が生まれてきたものといえます。いわゆる人間不信という社会の最大の問題が、戦後の経済発展のあり方の必然的な結果として起ってきたのです。そこで今日では、経済的な方面はもちろんのこと、ともかく「量から質へ」という認識に立って、ものを考えて行こうというわけです。

そういう意味では、「もはや経済も経済だけでは解決できない。むしろ教育とか宗教などによって手助けを受けなければならぬ」という私の持論となるのです。しかし今まで「宗教」となるとなくいつてきたものも、色々と科学的な研究が進んで、細かく分析解明されるようになっていきます。たとえば、赤ちゃんが母親に抱かれてお乳をもらう場合などにも、もう赤ちゃんの最初の心持ちが形成されているのです。赤ちゃんが母親に対してもつ安心感、心理学でいう「基本的安定感」とか「基本的信頼感」といわれるものですが、これがありますから人生における様々な苦勞や心配ごとに接しても、根本的には信頼できるものとして無意識のうちに受け止めているわけです。

毎日の生活でも、床屋さんがカミソリをもっている

我々はなんの危険も感じません。時にこれを疑って、危ないと思うようなことがあれば、むしろこれがこうしてノイローゼとなるような仕末です。つまり我々が今日正常に生きていることは、母親が幼児期の子供を抱く暖かいなしわぎに由来しているわけで、この信頼感こそが人間の精神構造のもっとも基本的なものであるというわけです。

この事実から、我々人間の大人としての行動の根本において生かされている母親との最初の関係が、いかに大切なものであるかを知るわけです。母親が育くんでくれた人間への信頼という想いが、我々の心の活動の基礎をなしているというわけで、まことに重要な事実ではないかと思うのです。

おそらくそういうことを古今の宗教は説こうとしていたのではないかと思えます。現在の教育にもそうしたありようを配慮する姿勢が強く求められるものと思われるのです。

(二)

我々の仕事である銀行業務は、「信用」というものの

上に築かれているということで、経済学者なども、"物物交換から貨幣経済、そして信用経済へ"というように分類しております。ですから自分の商売といたしまして、信用とか信頼ということが大きな問題となっているわけです。ところが現在は、人間不信ということがひとつの流行語になっている時代でもあります。人間同志の信頼感ということが回復されれば、すべてのものごとが解決するのではないかとも思うのです。

もちろん銀行制度というものの出発は、すでに徳川時代からあったわけですが、その当時の様子を井原西鶴などが細かく描写していますが、今日いう手形というものがもう世の中に出回っている時代です。その手形が決済されなければ「満座の中でお笑いいただいても結構です」というような証文を、当時の商人がすべて書いているのです。つまり、商売をやって行く上には、そういう約束事がきわめて大切であったわけですから。今日では約束を破れば損害賠償とか色々あるわけなんです。根本は信用に連なる行動をすることが人間としての使命であるということをもっと認識しなければならぬのです。それが守られない場合は、「満座の中で笑われる」という日

本の経済営為のスタートにおける基本的なあり方も、いさか見過せない内容をもっていたように思うのです。人前で笑われても仕方がないというような、いわば人間としての名譽をかけて信用というものをひたすらに守っていたという風に思われるわけなんです。

もちろん日本の文化は恥じの文化などといわれていますように、名譽とか体面とかいうことがことさらに重視されたことは否めませんが、ともかくそういうことと裏腹に日本の信用制度というようなことも成立してきたわけです。ことに戦後はそういう「恥じ」というようなことを重く見ないようになってしまう、我々の経済制度、信用制度というものがスタートにおいては、自分自身の人間としての名譽というものをかけて成立してきたものであるということ、今日改めて考えなおさなければならぬことであると思うのです。

したがって原点に立ち返って、経済行為を営む人間としての名譽を、今日では「生きがい」などともいっているのですが、そうしたことを再び問いなおす姿勢が強く要請されるわけです。とくにそれは、我々銀行員などが一番考えて行かなくてはならないことだろうと思いま

す。お互いの銀行間の競争も非常に激しくなり、人間の信頼とかいった心の問題とは違うもの、つまり預金高をはじめとする質というよりは量が測れるものごとの過当競争という問題に発展しているのです。経済成長という中における人間の人間としてのあり方が、多方面から反省されているとはいえ、根本のテーマである「量から質へ」という問題もなかなか改めなおされないのが、むしろ銀行の正直な現状といっても過言ではありません。

まさしくそういう中において、今求められるのが、人間ひとりひとりのプライド（名誉）ということでしょう。

ところで我々はよく「お客様（消費者）のために」ということをモットーとして、銀行の姿勢を強調しているのですが、これもお客様のために努力すれば、おのずから銀行の利益としていずれ還元されてくるものなのである。しかしそれにつけても、銀行員にとってもひとつ重要なことは、自分自身に納得させるか、ということであろうと思います。銀行員として、なにを恥じるのかという基本的な問題を確認しておく必要があるのかと思ふのです。もちろんこうした姿勢は一般の人々にも通

ずるところなのでしょうが、たとえば『論語』の中に、「いにしえの君子はみずからのためにする。今の君子は人のためにする」というような一文を諸橋徹次先生からお聞きしたことがあります。普通我々は、人のために、つまりお客様のため、消費者のためにするのが大変立派なことであると考えていますが、本当はいにしえの君子は「みずからのために」というように自分自身の真つすぐなあり方を求めて、自分自身がどのように納得し、あるいはなにを誇りとし、あるいはなにを恥ずかしいことと感じて正直に生きて行くか、ということが大事であるというわけです。

そうして我々の銀行業務の原点である江戸時代の手形の話から、一貫して流れている姿勢は、ひとつには「信用」ということであり、またひとつには実際に業務に携わるその人その人の心のもち方が結局のところきわめて重要なこととなってくるということなのです。

(三)

我々は組織の中におりまして、仕事の質量もある程度限られてくるわけです。仕事の内容によっては他の人た

ちをお願いすることが多くあるわけで、そこには当然信頼という問題が起ってくるわけです。ひとり残らず信頼し合って行くような企業体ができれば、もちろん我々にとってこれ以上の幸福はありません。我々もこうしたかけがえのないものを目ざして努力を重ねて行きたいと思っていまするわけなのです。

こうしたことを考えながら反省しなければならないのは、ひとつは下心あって、つまりこちらが信用して接すれば相手も信頼してくれるだろうというような姿勢であってはならないのです。また別の視点からいえば、信頼ということを手だてとして、他の努力をなにもしないで、一番安直な方法で解決して行こうという考えなども、つとめて注意しなければならないのです。それから信頼ということとは人を信頼することですが、はたして自分が人から信頼される人間であるかという反省が常に必要なわけです。もちろん、そういう人間同志の集まりですから、裏切られることも当然あるわけですし、むしろ裏切られることをある程度覚悟しながら、さらに人を信頼して行くという姿勢こそ求められるのです。そうすれば裏切られた不平とか怨みなどというものも消えて行く

でしょう。要するに、「結局しつかりやってもらうのだ」ということの代りに、信頼とか信用ということが使われているのだとしたら、やはり、これは経営者側の怠慢であると思うのです。

先日NHKの「宗教の時間」で、天竜寺の管長さんのお話しをお伺いしたのですが、その方のお師匠さんは非常にきびしい方で、ある時は自分をお寺から追い出したりした師匠であったそうですが、「今でも自分はその師匠のことがなつかしくてたまらない」と申されておられました。なるほどこれが信頼関係ということの究極だな、というように感心させられた次第でした。そういう決して甘い、きれいな面だけではないところに本当の信頼関係が成立しているものと思ったわけです。表面的な安易な部分に決して幻惑されない真心からの信頼関係を作り上げたいものと、つくづく感じ入ったわけです。

〔文責編集部〕

今回掲載させていただいた「信頼について」は、宮崎銀行頭取の井上信一さんのお話しです。このお話しは、五月二日（月）から四日（水）にかけて放送されたものです。

ふるさと紀行

寺棋将と山月



にし ざわ しょう しん
西 沢 正 臣

(山形県寒河江市清水寺住職)

○月 山

雲の峯いくつくずれて月の山

山形県は山と温泉の多い所で、県の中心部は村山平野で、遠く目を巡らせば、東南には蔵王山、南西には飯豊・朝日連峯、北には鳥海山が聳え、裾野は日本海に続き庄内平野となる。村山平野から庄内平野を流れるのが、最上川で山形県の母なる川だ。県の中央よりやや北西にあたって月山がある。

月山は、羽黒山、湯殿山とともに出羽三山といわれ、古くから信仰の御山として広く知られ親しまれてきた山である。白雪を頂いた山容は丁度満月を地上に据えたような、まろやかなたたずまいで気品に満ちたものだ。この山は威厳をもって聳えているというよりも、貴婦人が静坐しているという表現が適している。

五月も半ばを過ぎ、ながい冬眠からようやくさめた月山は、裾の方から徐々に雪が解けて黒ずんだ山肌が遠目にもわかるようになると、急に春の粧いとなる。四五米もある残雪の中に山毛櫨の太木は芽を吹き出し、秒ぎざ



八月中旬の月山スキー場

みで芽はたちまち伸び、触れれば溶けそうな柔かい若葉となる。

清浄無垢という言葉は、深山の雪を象徴するためにあるのでろう。雪の絨緞に新緑滴る山毛櫸の原生林は、ま

さしく大自

然が、人間

に与えてく

れた至高の

美というべ

きか、その

言葉を知ら

ない。樹間

に鳥の声を

幽かに聞く

が、見上げ

る空には鷹

が飛翔して

いる。人は

こうした大

自然の山に

憧れ、崇拝の念を持ったのもまた当然だろう。

戦後蔵王山は冬山スキーのメッカとして、クローズアップされ、シーズンには百五十万人もの客が訪れるという。岩手県八幡平の樹氷、蔵王の樹氷は、ともに壮大さにおいて有名で、樹氷名付けの親は、旧制山形高安斎教授の命名である。昔は樹氷を神わざと見て尊んだそうだが、今は単なる観光以外なものでもなくなった。

一方月山は「夏山スキー」として近頃頗る繁昌して来た。最も美しい季節はやはり、四五米もある残雪に安坐せる山毛櫸林の壮観さは、五・六月頃だろうと思う。山麓では木の芽（あけびの新芽）や、こごみなどが揺れ、七月には月山特有の筍（篠竹の一種）が中腹に茂り、この筍採りで賑わう。

出羽三山は信仰の山だから、白衣を着た行者姿の三山講員が、六根清浄の杖を頼りに、参拝するのだが、残雪や万年雪を踏み越える爽快さは、終生忘れ得ぬ思い出となる。

○将 棋

目に青葉山ほととぎす初鰯

ほととぎすは私の大好きな鳥である。誰に頼まれたのか知らないが、夜昼なくいそがしく飛び廻り鳴く鳥だ。声は物凄く甲高く聞こえるが、姿はなかなか見えない。

いかにも懶者をせかせるような鳴き声を聞くと、尻でも叩かれる思いで、農家は田植えを急がなければならぬ。なぜかって、それは、夏の短かい東北地方では田植えを早くしないと、冷害凶作に遭う危険があるからだ。

田植えが終れば、「半作」といって一安心、稲作半分の作業が終ったことを意味し、早苗^{なぶ}鑿の宴となるが、これがまた何とも言えない楽しみである。田植えを手伝ってくれた人を中心に、家族全員が、膳につくのだが、ユニークなのは、きな粉や胡麻をまぶした、お握りをコンビにして、淡緑色の大きな朴の葉に包んで鑿するのだが、朴の葉の新鮮な香りが、お握りにうつって調和した素朴な味はまさに絶品である。

子供達の口のまわりは、きな粉で黄色になるなど童心を楽しませる。大人達は地酒に興がのり、やがてノド自慢の民謡となり、誰かが、新庄節の、

あの山高くて、新庄が見えぬ

新庄恋しや、山にくや

と唄えば、待ってましたとばかりに調子を合わせ、お次は花笠音頭で、

芽出ためたの若松様よ、

などから、真室川音頭、最上川舟唄と尽きることなく続き、夜は深くなつて行く。

田植えが一段落すると、湯好きの者は湯治に、里に残る者が将棋好きは、天狗の腕くらべが盛んになるのも年中行事だ。

「ちえっと、ちえっと待った」

「だめだ、待てばりして、一遍や二度なら仕方もないけど」

こういう会話がとび出し、熱があがり夢中になつて駒を動かすのが天真爛漫の天狗様達の対局風景である。最初の一局は慎重そのものだが、番数が進むにつれて将棋は粗相になり、負けた方は早く勝ちたい焦りがでて、一層負けに拍車をかける羽目になるらしい。

ある時対局が白熱化し、たしかに自分が持っていた答の一步が無く、周りを探しても見つからず、不思議だ、不思議だといっている御本人が菓子と間違つて口にして

いたなど、相手の茶を間違えて飲み干し一向平気な姿など見ると正気の沙汰でない。将棋は下手でも、笑の種を作るのは名人クラスが多い。

将棋好きが遠慮なく、何時でも集まって気楽に対局するには、第一に場所だ。そして将棋好きの主人と理解ある家族が揃わないと、集まりにくい。そこで、お寺様は一番よい、という訳で大勢集まるようになった。親子二代にわたって、おしみなく開放である。

風薫る部屋の戸を開け放って、愛棋家何十人と集まって、『早苗饗将棋大会』が賑々しく開かれる。将棋とは不思議なもので、勝った話は始終聞くが負けた話は滅多に聞かない。つまり勝った人ばかりで、負けた人は娑婆に居ないことになるのが奇妙な現象だと思う。たまに負けた話を聞くと、大抵一手違いで負けたという。一手違いとは大した意味が含まれており、結果的に表面だけ見れば如何にも一手違いであるかも知れないが、一手の中に潜める手は無量大である。

無限大の一手を知る人は強者であり、上手な人である。私の寺で大学将棋部の合宿練習など催すが、彼等は概して理論派で緻密で定跡に精通しているから、相当の

強者がいる。彼等は一手の広さと深さをしみじみ知っているようだ。

この間、知名の観戦記者が来訪された時の話であるが、『対局者の心理は微妙に盤上にあらわれるものです、ある観戦の時でしたが、後手番になった棋士が、「また後手か」と呟いたのを聞いて、この人は前に後手番で負けたので、こだわっているな、気おくれしているなと思った。結果はその棋士は負けでした。将棋の先後手後手には優劣なしが、現代将棋の通説ですが、この棋士は心理的に負けでした』

と。この話を聞いた私は、一期一会、虚心坦懐、執着するな、今の今に生きる、など高僧、名僧の心境を想うてみた。

天童市は将棋駒の産地で、全国生産の八割を占めるといわれ、四月下旬花の舞鶴公園で催す人間将棋は全国的に有名になった。将棋寺玉照山清水寺は天童から十キロ程西方に位置し、親子二代にわたって将棋を愛し、日本アマ将棋名人が誕生し、今では将棋寺として愛棋家から親しまれている（僧侶でアマ将棋名人になったのはただ一人のみ）。

時に思う —「時の記念日」によせて



いわ さき なか お
岩 崎 中 生

「時とは何か。だれも私に尋ねないとき
には、私は知っている。しかし尋ねられ
て説明しようと思うと、私は知らない」
これはローマ時代の哲学者、アウグステ
イヌスの有名な言葉（『告白』第十四章）
である。「時」は昔からいろいろな人々に
よって問われ続けてきた。しかし、今だに
これといった答えはでていない。

確かに人は、このアウグステイヌスのい
うように、普段「時」というものを知っ
ていると思っているが、いざあらためて
「時」とは何だ、聞かれてみると、例外と
その正体を知らないものだ。それは「時」
があまりにもわれわれの身近にあり、また
この時について考えてみる機会が少ないか
らであろう。

昔はともかく、今やわれわれの生活から
「時」をはずすことは不可能なことだ。朝
起きてから夜眠るまで、われわれは「時」
に追われつづけている。しかし、これは本
当の「時」であろうか。それは単に「時
計」の回転に追われているのではないだろ
うか。

時計とは、人間が自然現象のなかの周期
的な変化、リズムから作りだしたものであ
る。それは、自分たちにもっとも身近な呼
吸・脈搏、鼓動から始まり、動植物の生
態、太陽や月の回転や盈虚を経て、夜空を
飾る星座の移動にいたるまで、さまざまな
リズムとサイクルを発見して、それらの間
の相互関係を考え、基準的な単位としたも
ので、もともとは何の分節もない「時」の
流れを、われわれ人間の生活に都合のよい
ように分割し、秩序を与えて「時」を構造
化したものである。たしかにこれは人間の
大発明だった。人はこの時計を作りだした
ことによって、日々の生活に区切りと予定
を見い出したのである。しかし、現在人々
はこの時計の針が刻一刻と文字盤の上を動
いていくのを見ながら、ただ盲滅法に走り
廻っているとはいえないだろうか。

フランスの詩人ボードレールは『パリの
憂愁』のなかで、「時」について次のよう
なことをいっている。「いつも酔っ払いな
ければならない。すべてはここにある。こ
れこそ唯一の問題だ。君の骨を砕き、君を

地面に押し曲げる時の重圧を感じないためには、絶えず酔っていないければならない。しかし、何に？ 酒に、詩に、徳に、君の好きなように。ともかく酔いたまえ……」と。彼にとって、生きている人間のうえにのしかかってくる「時」の重圧から逃れる道は、酒と女と詩であった。いや、このような頹廢的な享樂だけではなく、道徳や学問さえもが、人が「時」の重圧を忘れるための手段だと彼は思っていた。

時計ならば止めてしまうこともできる。しかし「時」を止めることはできない。人は、いや、この地上のものすべては、この「時」のなかに生死しているのだ。「時」は、すべてのものの未来を瞬間ごとに削りとり、二度と取りかえすことのできない過去へと葬りやっってしまう。人は、楽しい時が過ぎていつてしまうのを、非情な時といつて呪い、苦しい時には、悪い時はかりではないさといつて、時が早く過ぎることを祈る。また、どんなに楽しいことも、苦しいことも「時」はいさいかまわずに流してしまう。

鴨長明が「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世のなかにある人と栖と、またかくのごとし」と、『方丈記』の冒頭に綴るとき、そこには生と死とのあいだに揺曳するさまざまな人の営みも、時の流れのなかに置いてみれば、空しいものであると、仏教で説く無常観をみごとに表現してはいないだろうか。そしてまた、ゲーテが『ファウスト』の終幕に「移ろいゆくものはすべて比喻に過ぎず」と、前記の『方丈記』と本質的に同じことをいっているのも、やはり「時」の無常を感じていたからではないだろうか。

しかし、今といわれるこの瞬間瞬間の連続のなかに生きているわたしたちには、はつきりと限られている生命がある。千年も万年も生きられるわけではない。せいぜい生きても百年がところだ。いや、交通事故や公害、また今騒がれている地震のことなどを考えると、明日をも知れぬ生命ともいえる。このような現在を、わたしたちはど

のように生きたらよいのだろうか。「何をしても、どうせ死んでしまうなら同じことだ」といって、人間として何の価値ある仕事もしない人もいるだろう。また、あまりの忙しさに自分が何をしているかも分からずに動き廻っている人もいるだろう。そしてまた、生命は大切なものだと知りながら、日々過ぎていく時を無駄に費してしまふ人もいる。

一時を無駄に過ごすことは、一時を死んでいたことと同じことである。過ぎ去ってしまった後、どんなに悔んでみても「時」は決して戻ってはこない。「生きる」ということは「時」の無常を知るとともに、「時」の尊さを知り、そのなかで自分が何をしたら一番よいかを考え、行動することではないだろうか。仏教の教えの中に「今日好日、所在道場」という教えがある。「時」の大切さを忘れ、無為に過してしまいがちな毎日であるが、今一度わたしたちの生活を見直し、反省してみる必要があるのではないだろうか。

随 想

心のままに [五]

川 内 知 光
かわうち ちこう

インド仏蹟参拝 (一)

仏教大学生のためのインド仏蹟参拝団に加わって、私共夫妻が神秘の国。インドを訪ねたのは昭和四十一年のことです。私はスライドを写して、これによって旅費を稼ごうと考えて、カラー・フィルムを沢山仕込んで行ったのです。ところがさて、この目でお釈迦さまの伝記や教えを思い浮べて仏蹟参拝をいたしますと、まことにありがたくてそのような浅ましい打算的な考えはどこかへ消えてしまつて、随分沢山の場所を訪れて写しましたが、謝礼は勿論旅費も自弁なのです。それで自分は満足なので

す、福井県の友人も来て呉れと言いますので数ヶ所の席を造る様に頼んでいたのですが友人の急逝で、これは実現いたしませんでした。

インド仏蹟参拝 (二)

インドの大学を訪問して大学生同志の交換会を開きました。

学長曰く、「私の大学は赤旗を振るようなことはございません(目的はカルカッタ大学でしたが学生騒動で学校は閉鎖されていました)。これから校内を案内いたしますが、運動場も狭くスポーツも盛んでありません。本校の教育方針は、『日本を見習え』とい

うことです。日本は徳川時代の二百余年の封建時代には国民は臣政をうけました。ところが明治維新後二十余年にして世界五大強国の一つになつたではありませんか。ところが日本は太平洋戦争にてインド以上の貧乏国になりました。しかるに今の日本はどうでしょう。アメリカに次ぐ繁栄国になつてゐるではありませんか。我々インドもやってやれぬことはありません。お互いに頑張ろうではありませんか」と言われました。まことにうれしいお話を聞かされました。

その時学長から、「岡倉天心先生は日本の思想界においてどういう地位を占めてゐるか」という質問が出たのです。岡倉先生の著書は英文で書かれて日本語をしたものですが、私は『茶の本』、『アジアは一つなり』の日本語訳は読んだのですが、内容はすでに忘れてしまつてゐるのです。まことに困つたのですが、「岡倉先生は『アジアは一つなり』と言われました。その『アジアは一つ』というのはどこで一つなのか。中国か日本か。否インドに一つということ

あります。それで私共は「アジアは一つ」のインドを訪ねたのであります」と苦しい答弁をしたのです。二十数人の大学生は全部岡倉天心の名前さえ知らなかったのです。かりに他の大学教授が引率したとすれば、仏教学については深奥を極めていたとしても、岡倉先生の名前を知らなかったとすれば大恥じをかくところだったと思うのです。

インド仏蹟参拝(三)

旅行に立つ以前に、インド仏蹟参拝をしたことのある友人からインドの事情を聞いていたのです。「インド旅行は何一つ食べものがないという覚悟で行きなさい」というので、白餅、乾ラーメン、砂糖、醬油、味の素からコーヒーにいたるまで、ポストンバック一杯つめて用意して出かけました。ところがユースホステル等に泊りましたが、日本から持っていたこれらが、結構食べられるのです。それで三日目の夜、白餅を出してあげたのです。学生達はフラ

イパンで焼いて砂糖、醬油をかけて「日本の味だ」と大喜びです。六日目の夜はラーメンを出しました。「奥さん、私達は天幕旅行等で馴れていますから私達がやりましょう」と、また日本の味を味わうことになりました。

水のことも聞いていたので、水筒を持参して、湧かした湯を入れて貰って旅をしました。これも旅行中大いに助かった次第でした。

インド仏蹟参拝(四)

K君から「ボールペンを喜ぶから持って行った方がよい」というので、安物を三本程買って行ったのですが、最初のカルカッタのホテルで部屋に案内したボーイに差し出したら、ボーイは「ブッシュ、ブッシュ」と言うのです。もつと上等の押し出し式のものをくれというのです。「しまった」と思いましたか、次に靴を磨きに来たボーイに恐る恐る差し出しました。すると「ナマステ(有難う)」と言って喜んでくれたの

ですが、九十何%文盲だというインドにボールペンを欲しがる訳が分らないのです。

インド仏蹟参拝(五)

インド仏蹟参拝をして、お釈迦さまのような偉い人が出られたのに、「何故インドはこのように貧乏なのか」と何日も思ったのでしたが、考えてみると、お釈迦さまは金持から貧乏の悟りの暮しに入られたのですから仕方ありません。

インド仏蹟参拝(六)

インドに行ったらたくさんの子供が、「何かくれ」と手を出します。うっかり与えてはいけないと教えていただったので、手を出すものたちは子供ばかりでなく大人までもまじっていました。確かに貧しい国ではありますが、私が用意して行ったキャラメル五十箱ばかりもまたたく間になくなりました。



芭蕉と仏教(二)

河野喜雄こうの よしお

(文芸評論家)

四

芭蕉は、下級武士の次男として生まれ、藤堂家の侍大將、五千石の藤堂新七郎家の嫡男、主計良忠の子小姓として、真の「仕官懸命」十余年、良忠の側近随一として、頗る一家の信任篤く、他日、良忠嗣家の場合、彼が相当な石取りの身分にまで昇進し得ることは、衆目の見るところであった。すなわち、愈々、「仕官懸命」であった所以である。

しかしながら、その良忠は、寛文六年（一六六六）、肺結核のため、二十五歳にして夭折し、そのあとは、良忠

の弟、良重が継ぐことになった。

その良重は、万治元年（一六五八）、別知三百石を賜って分家していたのであるから、当然その執事役の者が居り、良重が本家に帰って来た時、その者も当然、躰いて来た。芭蕉の立場は、ハッキリと無くなってしまったのである。彼は、藤堂家を罷めるほかはなく、藤堂家は一応彼を慰留したのではあったけれども、今や「仕官懸命」の地を失なった彼として、到底、藤堂家には止どまれないのであった。

その彼として、遇ふべき道は、仏門に入るか、俳諧の道に進むか、二者択一でしかなかったのである。下級武

士として、その「仕官懸命」の地を失なった以上、当時としては、それ以外の途は有り得なかったからである。

良忠は四月二十五日に逝去したのであるが、その恰かも七七、四十九日の翌六月十四日、芭蕉は、良忠の父良精から、高野山へ寄附する位牌・日牌を託されて、同山報恩院へ旅立っているのであって、当年、二十三歳であつた芭蕉の胸裏に、この時、高野山で剃髪入道して、善知識になりたいという切望が燃えたであらうことは、尤に推し得るところである。

すなわち「仏離祖室の扉に入らんとせしも」であつたのである。

しかも芭蕉はやっぱりその稀有の天才のライフワークであるところの俳諧の道を選んだ。そして、脱藩して上京し、北村季吟の執筆として勉学数年の後に、寛文十二年（一六七二）翌年九月改元、延宝）二十九歳、季吟門先輩の素堂・卜尺らの「旅への誘い」によつて東下し、一路俳諧に精進したのであるが、その間、その自風開発（貞享元、一六八四）までの間に、中国伝来の儒教・仏教の哲学観をも充分に摂取していたのであって、その仏説による無常観をも、ほぼ体得していた、と考えてよからう。

延宝八年（一八八〇）、芭蕉庵入庵に前後して、仏頂禅師に参禅以来、自風開発までには四年を経過しているのであるから、芭蕉の天才を以てして、仏説へのその程度の観入・理解は決して不可能ではない、と思われるからである。

そして、彼の抱懐するところの、この仏教的「無常」観と、彼自身の選んだ「俳諧の道」への孤行独往とが、実は互いに表裏を成して、彼を支えていたのではなかったか、と私は考える。

五

その俳席における夕食の後に、芭蕉は、蠟燭を早く消せ、夜の更けることがマザマザと目に見えて、心が落ちつかぬ、と言った。

時々刻々の推移が、諸行を無常にする。その諸行無常とは、釈迦自身の説法であつた。

世尊、無常偈を説いて曰う。「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」と。（『伝燈録』）

すなわち、万象は常に変化してやまない。それがすなわち生滅の法であるが、万物はその生滅の法によって、生滅を繰り返し尽した上で、死にいたる、というのであって、弘法大師作と伝えられる「いろは歌」は、右の偈を和訳したものと云われる。

その知性に照して見るに、たとえば戦国の武将の武田信玄の人生観などに比しても、よし勝るとも、決して劣るとは思われない。

芭蕉が、その信玄と同等以上に仏教の無常観に徹して、常にその、「生死の切なる」思念に志向していたであらうことは、ほぼ疑いがあるまい。

その芭蕉は、その病歿三年前、元禄四年七月以降の起稿にかかる、「幻住庵記」の草稿の一文において、その自身の、早くよりの俳諧志向に言及して、

「などや、法をも修せず、俗をもつとめず、いとわかき時より、よこざまに好ける事侍りて、云々

と言っている。

そして、上述したように、彼が早く二十三歳にして、

良忠蟬吟の死去によって、その「仕官懸命」の地を失ない、その忘君の位牌・日牌を奉じて、高野山報恩院に詣でた時、その「仏籬祖室の扉に入らん」としたこと、切なるものがあつたにも拘わらず、遂にこれを思い断つて、結局俳諧の道を選んだことは、未だ若年であつた次第もあつて、それはまだ、「横ざまに好ける事」の魅力の方が、より強かつたためかも知れない。

しかしながら、東下後八年、延宝八年芭蕉庵入庵、仏頂参禅の時点においては未だしにもせよ、その後四年、その自風創始、開発の貞享元年（二六八四、四十一歳、歿前十年）当年前後において、芭蕉がハッキリと、信玄と全く同様に、「参禅、別に秘法なし」と信じ、「ただ生死の切なる」をのみ思念しつつ、只管にその俳諧道に志向していたであらうことは、ほぼ疑いない。当該時点において、彼がその自身の風雅観を持するとともに、同時にそれに先行する哲学観を堅持していた事実には、ハッキリした徴証が存するからである。

六

これを端的に言い切るならば、芭蕉は、言わば「難行

聖道門」を孤高独持したのである。

もちろん、仏教に教えられはしたのだが、その稀有の叡知によって、その仏教の真理であることを頓悟・自覚し、その自身の「難行聖道」であるところの俳諧道に直し、その自身を生き通し、生き切ったのであって、その「生き切った」ときに、かの生滅法に従って、「生滅滅已、寂滅為樂」たるべきことを、彼はハッキリと弁まえていたのである。

すなわち、芭蕉の人生、その俳諧専心のそれは、かのキエルケゴールのいわゆる、「死が最後であり、最後が死である」ところの、「死にいたる病」であったのであって、芭蕉は、もとより、充分にそれを自覚していた。

その命終直前における、前掲、

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

の一句の含蓄するところも、もとよりそれであるが、その「おくのほそ道」旅中においても、彼は次のような、凄絶、悲壮の一文を成しているのである。

はるかなる行末をかかへて、かかる病おぼつかなし
といえど、羈旅辺土の行脚、捨身無常の觀念、道路に
死なん、これ天の命なりと、氣力いささかとりなほ
し、路縦横に踏んで、伊達の大木戸を越す。

けだし、芭蕉一代の名文であって、ここにも彼の無常観はハッキリと示されており、彼が難行聖道の、偉大なる人物、不世出の大詩人であったことは、今や、疑問の地を余さない。

然り、而うして、「生滅滅已」して、いよいよ、「最後が死である」ところの、その「死」が、ハッキリと彼自身に自覚せられたとき、彼は卒然として一個の凡人に立ち帰り、「寂滅為樂」の、仏手にすがらんとする。

けだし、かの富士山を支ゆるものが、その広大無辺の裾野であるのと全く同様に、芭蕉自身にも、その富士の裾野に比すべき凡人性、俗人性があつて、それが彼の稀有の天才を支えていたのである。

そして、今や命終を目前にして、天才の天賦の使命が終らんとする、その寸前にのみ、天才の中の凡人性・俗人性は、その生涯にただ一度だけ、必死の絶叫をするの

である。

そして、その自身の十字架上の刑死を幾度か予言しつつ、充分それを自覚していた筈の、かのクリストが、その十字架において、

エリ・エク・レマ・サバクタニ

「神よ、神よ。何故我を見棄て給うや」

（『マタイ伝』第二十七章、四六。『マルコ伝』第一章、三四）

と、実に二度に亘って絶叫したように、芭蕉は、前掲、

……是を仏の妄執といましめ給へる、ただちに今の身の上におぼえ侍る也。

此後は、ただ生前の俳諧を忘れんとのみ思ふは。

の扁語を吐いているのである。

その「此後は……忘れんとのみ思ふは」という語が、俳諧を忘れて、すべてを、仏の御手にお任せしよう、の意を含んで述べられていることは、先にもすでに触れた

通りである。

芭蕉が、形式的にいわゆる「仏門」には入らなかったものの、仏教に依信しつつ、その「難行聖道」の自身の道を歩み通し、歩み切った人物であったことは、もはや疑いを容れない。

七

最後に一言だけ附け加えておこう。

芭蕉が右の扁語を吐いたのは、歿前四日の十月八日であるが、その翌九日、翌々十日、翌々十一日まで、芭蕉はやっぱり俳諧に関する言出をしており、また弟子たちが発句の競作をさせたりしている。却々、「俳諧を忘れん」どころの話ではない。

けだし、その「死にいたる病」は、「死が最後であり、最後が死である」ところの、その「死」まではまだ癒ることのない病いであるからである。

（了）

◇

◇

◇

◇

◇

◇



念佛ひじり三国志 (弐)

一法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

「勸進帳」は歌舞伎でも名作狂言の一つである。

奥州へ逃亡する源義経の一行が安宅ノ関を通る。山伏姿に変装している。勸進帳という題名どおり彼らは大仏復興の資金集めを旅の目的としている。

一行の最後尾をゆく荷物持ちの侍者を、関所の長官富樫が見とがめる。詳細に吟味しようとする、武蔵坊弁慶が歩み寄り、

「お前がぐづぐづしているためにお役人に余計なお手数をかける。もっとしっかり荷物をかつげ」

と、錫杖で侍者を乱打する。

この侍者こそ弁慶の主君、九郎義経であった。

涙をおしくして主君を乱打する武蔵坊弁慶。このくだりが「勸進帳」のクライマックスである。

関所の長官富樫も荷物持ちの正体を見抜いたが、弁慶の忠誠に胸打たれて、これを見逃してやる。日本的な情念もたつぷり盛りこんでいる。

義経主従が吉野の潜伏から伊勢へ抜け、美濃路から北陸を通過したらしいことは「吾妻鏡」にも書いてある。ただし、安宅ノ関のようなドラマが演じられたのかどうか。後世の創作と推理するのが妥当なようである。

＜勸進帳＞



前号のあらすじ

ただ阿弥陀仏の御名を呼ぶこと。法然上人の大原談義における主張はこれに尽きていた。乱世末世であるからこそ、人は物質的にも精神的にも救いを求めていたし、それに応え得たのが法然上人の称名念仏の教えであった。これはまた、悟りを求めるために王位をも捨て、悟りを得た後も入滅に至るまで民衆の中を教化遊行し続けた仏陀釈尊の精神と軌を一にするものでもある。

高度な理論と行の体系こそが仏法であるとする中納言法印顕真や明遍にとつて、これは思いもよらぬ簡潔な実践行であった。が、しかし顕真にとつて、この大原談義の席は単に談義の場という意味を持つだけでなく、天台座主の地位を目ざすに必要な勢力を得るに恰好の新興勢力である念仏者たちに接近する場でもあった。後に空阿弥陀仏と号して法然門下に帰入する明遍には思いもかけぬ法然の言葉ではあったが、そこに新しい仏教の胎動を感じていた。

後世の創作だからと言って「勸進帳」のすべてを抹殺してしまうのは、どんなものであろうか。筆者はつねに創作の底辺に厳然たる史実が埋蔵されていることを信じたいのである。この場合、厳然たる史実とは「勸進帳」そのものである。

何のための「勸進帳」であるか。東大寺の大仏復元の

資金集めの勸進である。

鎌倉の頼朝に追われ、京都の朝廷からも逮捕令が出た九郎義経が、なぜ遠く奥州平泉へ落ちのびる決意をしたか。まずその原点に立って考察を深める必要がある。

義経の奥州行きは、古来きわめて短絡的に思考されてきた。鞍馬にいた少年期、落ちのびた先がそこで、藤原秀衡によって庇護されたいわば第二の故郷だから、という主張である。

しかし義経が兄頼朝の挙兵を知って、関東へ馳せ参じようとしたとき、秀衡はこれを快く支援したであろうか。

それはない。むしろ拒否した気配さえある。なぜなら秀衡は、頼朝が関東武士の支援を得て軍事力が強大になったころ、白河ノ関あたりに二万の兵を押し出し、頼朝を牽制するかなのような動きを見せているからだ。まだ強大な力を温存する平家への忠誠を顯示した行動である。

だいたい秀衡一門は源平に限らず、中央政界の動きにはつねに中立を守ってきたのが家憲であった。遠い奥州にいて、なぜそんな渦に巻きこまれる必要があるのか。宏大な領地と十八万余騎の軍事力、それに加えて砂金と

いう黄金を抱えている奥州藤原氏なのである。

鞍馬から逃げてきた九郎義経を好遇したのも、この伝統の中立政策からの発想にすぎない。万一、源氏が勢力を盛り返したとき、左馬頭義朝の御曹子を抱えていることは貴重な切札ともなる。

だから義経を、坂東の戦陣へ送りたくはなかった。日ごろ一朝蹶起のときは奥州十八万の大軍を、と義経に口約束は与えていたであろうが、いざ戦機が到来すると言葉をつくして抑止したはずである。

九郎義経はそれを押し切って、富士川へ走った。随う兵は三百騎だったと言われる。それも現実に富士川まで来たものは八十余騎であった。

「何だ、たったそれだけか」

と頼朝は露骨に不快がったそうだが、義経に随った者にも純粋な奥州兵は何人いたか。大半は平治の乱で流亡した源家の郎党だったという。わずかに佐藤兄弟だけが秀衡の輩下だ。

「吾妻鏡」の元暦二年（文治元年）四月十五日にこんな記述がある。

関東ノ御家人、内挙ヲ蒙ラズ功ナクシテ多ク以テ
衛府ノ所司等ノ官ヲ拝任ス。各々殊ニ奇怪ノ由、
御下文ヲ彼輩ノ中ニ遣ハサル。件ノ名字、一紙ニ
載セ而タニソノ不可ヲ注シ加ヘラル、云々。

鎌倉頼朝の認可も得ずに朝廷から平家攻略の戦功とし
て官位をもらつた東国武士の非をなじつた記述だ。ここ
にはないが、その頂点として伊予守に任官した弟義経へ
の憎悪を露骨にした文意である。

兵衛尉義廉以下、二十三名を列挙し、口汚たなく罵倒
するのである。その二番目が、兵衛尉忠信であつた。

秀衡ノ郎党、衛府ヲ拝任セシムル事、往昔ヨリ未
ダ非ズ。涯分ヲ計リ、坐ラレヨシ。ソノ氣ニテヤ
ラン。是ハ狢ニオツル。

奥州の蕃人が北面の武士に任官した。そんな事例はか
つてない。身のほどを考えて、じつとしていればいいも
のを、得々としている。これは狢（イタチ？ 山猫？）に
も劣る。そんな意味であらうか。

秀衡の郎党が卑小な官位を得た、というだけで頼朝は
腹立たしいのである。彼らの所領を召し上げて、斬罪に
処せ、とも激昂する。

さかのぼって佐藤兄弟が義経に随侍して富士川へ走つ
たのは、平泉の数年間ではほど深い恩義関係が結ばれた
からであらう。

ところで奥州へ流亡してゆく時点で、佐藤兄弟はすで
にない。兄継信は屋島海戦で平教経の強弓に頸を射られ
て戦死。弟忠信も吉野山中をさまようさなか落命してい
るのである。秀衡の有力な郎党もないのに、義経はな
ぜ平泉を頼ろうとしたのだろうか。甞起したあの治承四
年、秀衡に抑止されているのである。今度頼つて逃げの
びたとしても、義経の一命すら保証されたいではない
か。奥州モンロー主義に徹した秀衡によって首を掻き斬
られ、鎌倉へ献上されぬとも限らない。

義経が生命の安全弁とも信じたものの、それこそ「勸進
帳」であつた。

俊乗房重源を大勸進上人としたこの募金組織は、朝廷
をバックに地方有力者には重要な意味を持っていたらし
い。中央政界と直結する唯一本のパイプとも言える。

現に寿永四年、大仏勸進の使者が奥州へ走ったとき、秀衡は即座に黄金五千兩の寄進と約束している。ちなみに同じ時期、鎌倉で頼朝は千兩だけを申し出た。

その後も秀衡は、募金に快く応じ続ける。奥州から送りこまれる黄金が、大仏復元のためばかりでなく朝廷の旅費用にも供されていた事実は、「玉葉」での九条兼実の筆が実証している。つまり秀衡への呼称が年ごとに昇格してゆく。奥州秀平だったものが陸奥の守となり、やがては鎮守府大將軍である。

黄金の威力であり、秀衡がねらった京都政界へのパイプが十分に流通していることを物語る。

九郎義経は、吉野に潜伏中、大仏復元の「勸進帳」を掌中にしたのであろう。別の史料は、その時点で大仏のため黄金三万兩の勸進を奥州秀衡に求めている。

二一

では、義経はその「勸進帳」を誰から得たのか。俊乗房重源自身からであつたらうか。

それは推定の史料しか残っていない。

史料はあとで詳述することとして、とにかく「勸進帳」

を掌中にした義経主従は奥州へ下る大義名分を得た。また流亡途次にも「勸進の使者」という通行券を握ったことになる。

吉野から伊勢、美濃、北陸へと旅を進めることが出来たのである。

さて、「勸進帳」授受の資料だが「吾妻鏡」は文治三年三月八日、南都周防得業である聖弘の記事を紹介している。

聖弘は鎌倉に呼ばれて嚴重な取調べを受けたらしい。

召シニ依ツテ参向ス。予州（義経）ノ師檀タルノ故ナリ。小山七郎朝光ニ之ヲ預ケ置ク。今日、二品（頼朝）御対面アツテ直ニ御問答ニ及ブ。仰セテ曰ク。戸州ハ邦国ヲ濫サント欲スルノ凶臣ナリ。而ルニ逐電ノ後、諸国ノ山沢ヲ搜シ求メ、誅戮スベキノ間、度度宣下セラレオワンス。然ラバ天下ミナ彼ニソムクノ処、貴房「独り」祈禱ヲ致シ、アマツサニ同意結構ノ聞コニアリ。ソノ企テ如何。

頼朝のこの詰問に聖弘は、天下がすでに平和を回復し

たのに、兄弟があい争うというのは面白くない。自分としては義経の安全を祈るのではなくて、この兄弟争いを悲しんでいるのだ、という意味のことを答えている。

周防得業聖弘がどんな僧であったか「行実ツマビラカナラズ」と註は書く。さらに「相模風土記」が信教と同一人のように記しているのは間違いであろう、とも念を押す。

信教とは誰か。

すでに本稿でも登場した木曾義仲のブレンだった大
夫房覚明である。

もと藏人道弘（みちひろ）と呼ばれ興福寺の学問所に出仕していたが、後に出家して叡山の黒谷へはいった。法然と数年間起居を共にしたらしい。

最乗房信教と名乗って黒谷を出たあとは再び興福寺へ戻った。以仁王の挙兵に同調し、激越な平家打倒の回状を僧兵の間にバラまいた。平清盛は大いに怒って信教を殺そうと躍起になる。しかし彼は顔に漆を塗って逃げまわった。美濃で源行家と会い、その口ききで木曾義仲の右筆となり、太夫房覚明と名をあらためた。

しかし義仲が京都で短時日の覇をとなえると、この旭

將軍ともうまくゆかず、姿をくらましてしまう。箱根山にひそんで今度は頼朝に接近する。建久元年には頼朝の妹が死ぬと、その導師をつとめたりする。

とにかく乱世を、歴史上の接点をわたり歩いた不思議な僧である。「吾妻鏡」は九郎判官義経の「同意結構」の首謀者にすることまでは忌避しているが、小説的には興味深い登場の仕方である。

周防得業聖弘が、太夫房覚明の後身だったかどうか。そんな詮索に深い意味合いはない。また義経の安全と祈禱したという事実も同断である。

問題は「同意結構」にある。

字義をどう解釈すべきであろうか。意志を同じくして、組織的に行動する、ということになるか。

組織的に行動する、とは何か。

大仏勧進の聖（ひじり）たちが義経の逃亡を助けている。頼朝はこの情報を掴んだにちがいない。しかもあれほど探索の網を厳重にしておいたのに、まんまと奥州平泉へ逃げのびてしまったらしい。

義経の奥州潜入が鎌倉へつたわったのは、同じ文治三年の二月十日（吾妻鏡）であったからである。

勸進ひじりたちの取調べが鎌倉で開始される。

義経の逃亡補助はもちろんだが、同時に奥州の秀衡と京都政界へのパイプを切断する意図がふくまれていた。

勸進ひじりの統帥者、俊乗房重源が鎌倉へ呼び出されたのは、聖弘が取調べられた約一カ月後、文治二年四月二十四日のことであつた。

「高野春秋編年輯録」巻第七には以下のような短い記述がある。

重源法師、新別所蓮社ノ交ワリヲ絶チ鎌倉ヘ赴ク。
是ハ頼朝卿之手書ガ法然上人ノモトニ到ルニ依リ、
上人是ヲ重源ニ送ルナリ。所謂大仏殿再興之器量
ヲ推挙セラルル故ナリ。

頼朝の手紙が法然のもとへもたらされた、とある。あらためて重源は大仏勸進上人の地位を法然によって推挙された、とある。

すでに以前からその地位にあつて、八面六臂に駆けずりまわっていた重源ではないか。三年前の文治元年八月には大仏落慶の供養まで終えているのである。

この記述は、今更何を言うのか、の思いがするであろう。

重要なのは、冒頭の一行だ。

新別所蓮社ノ交ワリヲ絶チ

である。

新別所とは、高野山の蓮華谷を指すにちがいない。重源は大原問答（文治二年秋説を取る）の前後、そこにいた。

門弟のひじり三十余名を駆使して、勸進の仕事に精を出していた。

ところが、このひじりたちが義経の逃亡を加け、「勸進帳」のお墨付きまで手交したらしいフシが、周防得業聖弘の取調べから判明した。そのパイプは遠く奥州の藤原秀衡にまでつながっているのだ。

頼朝は勸進ひじりの組織を危険視した。あるいは組織の根源を、高野山の蓮華谷にある、と洞察したのかも知れない。

理由があつた。

前年の文治二年、八月中旬のことだ。西行法師がふら

り鎌倉に現れた。何と言っても西行は当代の有名人だ。頼朝は彼を招いて、歌道や弓馬の道をたずねた。

西行の言葉は一つ一つ頼朝の胸にひびいた。最高の文化人である。頼朝には欠落したもののばかりであった。

「ところで法師が、こんど坂東へ下向された理由は？」

「これから奥州へ参る予定です」

「奥州へ」

頼朝の眼が光った。
平家は滅亡させた。一日も早く上洛したい。だが背後に藤原秀衡の存在がある。うっかり鎌倉を留守に出来ない。

現に木曾義仲や平家討伐時にも秀衡は白河あたりにまで兵を出してきて牽制していたではないか。

「奥州へ何をしに」

「黄金を調達して参るのです」

西行はあっさり答えた。

三

「黄金……砂金じゃな」

「さよう。三万両ほど」

「そんな大金を何のために」

「大仏殿復興のためです」

「ああ、勸進にか。話は通じておるのかな」

「すでに高野山の蓮華谷にいる俊乗房重源から依頼状が届いておるはずですよ」

「重源をご存じか」

「此方へ来る前、半年ばかり蓮華谷にいました」

未だ義経の奥州逃亡が噂されていない時点である。頼朝は三万両という大金に魅かれた。

だいたい奥州から都へ送られる砂金や貢馬は関東を通過してゆく。通過するたびに、頼朝はちゃっかりその一部を自分の献上品にすり替えてきたのである。名目は現在で言う通行税であるか。

こんな秀衡にあてた文書が残っている。

御館（みたち）ハ奥州六郡ノ主。予ハ東海道ノ惣官タリ。モットモ魚水ノ思ヒヲ成スベキナリ。但シ行商ヲ隔テ信ヲ通セント欲スルニ所ナシ。マダ貢馬、貢金ノ如キハ国土ノ貢タリ。予イカデカ管領セザランヤ。当年ヨリアラカジメ伝進スベシ。

＜奥州平泉・中尊寺金色堂＞



且ハ勅定ヲ守ルトコロナリ。

京都へ送りこまれる金品は、まず自分が宰領してからと重衡に朝廷との直接取引を封じている。

九条兼実の「玉葉」は頼朝のやり口をこう書く。

頼朝、法皇ニ貢物ス。ソノ物甚ダ輕微、殆ンド輕慢ヲ奉ルニ似タリ……後ニ聞ク。頼朝ノ進物ハ秀平進メルトコロナリ。

いま西行は黄金三万両を奥州から取り付けるといふ。頼朝としては凝れが出るような話だった。

「是非その話が順調にゆくよう祈ろう」

と頼朝は言つて、奥からだいじそうに一つの品物を持つてきた。

銀製の猫であった。

「これを、陸奥守（秀衡）に贈呈して欲しい。大仏勧進の話はきつと上乘の首尾となるであらう」

「間違ひなくお届け致します」

と西行はおし頂いた。

頼朝邸を出た西行。

鎌倉の街をぶらぶら歩いていった。路傍に童が二、三人遊んでいるのを見た。

「おい、これをくれてやる」

いま所領したばかりの銀製の猫を惜しげもなく与えてしまったのである。

冗談じゃない。奥州の重衡は俺の親戚筋だよ。こんな猫なんぞ贈らないでも話は聞いてくれるはずだ。

そんな西行の言い分めいた趣旨を「吾妻鏡」は書いている。この場面の頼朝は、カリカチュア以外の何ものでもない。

ところで奥州の三万両だが、上方へ届いたのかどうか定かではない。少くとも鎌倉をとおして貢金されなかったことだけは間違いない。頼朝は弟の義経をかくまう秀衡を非難する京都への訴状のなかで、砂金の貢金違約にも触れている。朝命にそむく行為だと言うのである。

この間の事情は九条兼実の日記「玉葉」からうかがうしか方法はないが、その筆づかいには裏を感じさせる何ものがある。三万両の金額ではないが、その一部は京都へ送りこまれた様子なのである。

こんな事情もあって鎌倉の頼朝は大仏勧進ひじりたちの秘密ルートに疑惑の眼を光らせはじめた。

文治二年の秋、大原問答があった直後、吉水の法然禪室へ立ち寄った俊乗房重源はそこで珍らしい男に遇った。

住蓮房だった。

彼はもと興福寺の衆徒だったが、平重衡の焼打ちの後、明遍僧都に拾われ、光明山で重源に帰依したひじりである。

だが住蓮房は勧進の仕事に従わず、しきりに法然のもとへ出入りして、じかに念仏の教えを受けている様子だった。

久調を叙したあと、住蓮房は鎌倉の空気を重源につたえて、勧進ひじりが義経の逃亡を助けている点に警告を発した。

「そなたはだいぶ鎌倉の様子にくわしいようだが、何かツテでもあるのか」

黙って聞いていた重源は、もの静かな調子で訊きかえた。

「ツテと申すほどでもありませんが、近ごろしばしば鎌

倉へ出かけ、武者たちを念仏教化をしております」

「ほほう、坂東武者どもをな。どんな連中がいるのか」

「千葉ノ介どのの一族などは、とりわけ熱心な念仏者になりました」

「千葉ノ介のう」

千葉ノ介常胤は同族の首領だが、頼朝挙兵の折に大功があった。下総の大軍を率いて馳せ参じ、三浦勢ともども平家打倒の主力部隊になったのであった。

後年になるが、この千葉一族は重源の奈良復興に金品の寄進を惜しまなかった。東大寺の戒壇院などは千葉常胤ひとりだけの財力で復元させている。

また常胤の六男胤頼は、奥州征伐で衣川の館を攻略、大守藤原泰衡の外祖父基成などを生捕る勲功をたてたが、この直後発心して念仏ひじりとなつてしまった。千葉六郎入道法所その人である。

場面を文治二年秋の吉水へ戻す。

住運は頼朝の信用を博した事例として、この年七月、知多半島の野間ノ庄での不断念仏会のことを告げた。

野間ノ庄には頼朝の父義朝の墓があった。しかし誰一人かえりみる者もなく、雑草やイバラでおおわれてい

た。伊勢から海路で知多半島へ上陸した住運は、土地の者から聞き出し、さっそく墓参した。鎌倉へゆき千葉家をとおして、その旨を頼朝に言上し、不断念仏会を興行する許しを受けたのであった。

頼朝は前廷射平康頼に命じて、墓前に小堂を建立させ、住運に参籠することを許したのである。

「蓮華谷のひじりたちは、目下鎌倉どのから疑惑の眼で見られております。何らかの手を打ちましないと、勸進上人、あなたの身が危うくなります」

「何らかの手……のう」

重源は思案にくれた。眼を法然へ投げた。どんなものでしょうか、と問いたかった。

法然は敏感に重源の意中を察して、

「あなたの目的は唯一つでしょう。奈良の復興です」
と、力強く言った。

「さよう」

「そのためには他をかえりみてはならないのです」

「他をかえりみてはならない？」

「いまの世の中を生きぬくうえで、いちばんだいじなことが何であるか、俊乗房どの、おわかりか」

「いちばんだいじなことで、ですか」

「選択です。ただ一本の道をえらぶことです」

「選択……」

「あなたは仕度第一、その道だけをひたすらに歩いてゆけばよい」

「勧進ひじりたちと絶縁するのは残念です。ああして、大原へもみんなやってきてくれる」

大原問答のデモンストレーションのことを、重源は思いうかべている。

この場での話は、住蓮房が鎌倉の情勢をつたえ、重源に警告を発しただけで終わったが、半歳後の四月には勧進ひじりたちとの絶縁を鎌倉頼朝に申告しなければならぬ破目に追いこまれてしまった。

鎌倉へ下る重源の心中はおだやかではなかったはずである。生命を保証できるものは、頼朝あてにしたためた法然の書状だけであった。

今その内容をつまびらかにする史料はないが、法然自身に勧進上人となることを懇望した頼朝の依頼を丁重に謝絶し、この重源こそは自分の身替りである、区々たる政治的な動きはせず、南都復興の一念だけに燃えてい

る、という事実を明記したものであったのであろう。

やがて重源は鎌倉に至って、頼朝から一切の疑惑を解き放たれ、正式に勧進上人を依頼されたのであった。

俊乗房重源が、自らの口や文章で、はっきりと「自分は法然上人の弟子である」と表明したのもこのころからである。
(つづく)

「浄土」教化トラクト

『おぼん』

B6判・表紙共八頁

定価一部二十円(二〇〇部以上 十八円)

送料実費

発行 法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○梅雨の季節の六月は、田植えをはじめとして、水の恩恵に深く浴する私たちの生活である。若草が水に濡れて、蝸牛（かたつむり）が「殻透くばかり」に青葉にしがみついている。艶やかな淡い紫の花、紫陽花（あじさい）も花の色を七変化に変えて、雨降る庭にやさしく咲いている。

静かなる心の上に

やはらかに落つるひびき

雨の音こそなつかしけれ

つくづくと聴き入れば

雨のひびき

そはさながら白き顔を寄せかけ

はづかしき彼の女の泣くに似たり

〔雨の歌〕より

と歌った三木露風の詩心も、雨々と降る雨の世界に静かなやすらかなさを見出しいてる。

紫陽花の濃き夕光に女去る 直人

一日の緑はやある植田かな かをる

○インドでは夏の雨期の間は遊行生活がでないから、出家修行者は定まった住処に止まって修行を積んだ。これを安居（あんご）というが、この作法は中国や日本でも受けつがれて、普通旧暦の四月十六日から七月十五日までの一夏九十日間を夏行（げぎょう）とか夏籠（げごもり）と称して、インドの雨安居に比定した。『宿雨初メテ収ッテ草木濃（こまや）カナリ 群鴉飛び散ル下堂ノ鐘』とは、禅家の言葉であるが、この時節、雨に霞む山間の草堂においてひたすらに説経に励む仏家もあろう。

○ともすれば、微くさい陰湿な梅雨時分ではあるが、古木や朽ち木の陰に生命をつなぐ苔類にしても、ひとときわやわらかい緑のしとねを作り、かぼそき花までもかかげるのである。私たちもこの「花苔」（はなごけ）のように、ひそやかな慈愛の花を咲かせたい。

「浄土」購読規定

会費一カ年二、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 四十三巻 六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十二年五月二十五日

昭和五十二年六月一日

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑑仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

《出版目録》

浄土宗出版事業協会

種 別	書 名	規 格	定価	送料
浄土選書 1	松濤弘道著 『仏教的生き方とは？』 やさしく人生の歩み方を教える理 論と実践のハンドブック	新書判 268頁	480	120
浄土選書 2	石上善応著 『仏像—その語りかけるもの』 わが心の反映としての仏像の美を 見つめる新しい思索の書	新書判 200頁	480	120
美術雑誌	『芸術浄土』② 特集 浄土宗の国宝・魂のふるさと 嵯峨野 ほか	B 5 判 120頁	980	160
	『芸術浄土』③ 特集 浄土宗の国宝（鎌倉篇）・ 鎌倉をあるくほか	B 5 判 84頁	880	160
布教シリーズ	① 浄土宗の葬祭 ② 私の一日一言 ③ 法然上人のおしえ	B 6 判 16頁	1部40 300部以上38 500部以上35 送料実費	
	④ 月影の歌（岸信宏訳下著）	B 6 判 32頁	1部60 300部以上55 500部以上50 送料実費	
	『浄土伝燈輯要』全一卷 伝燈諸列祖研叢の一大集裁として 明治初年発刊の和綴三巻本を一本 としてここに再版	A 5 判 1074頁	7000	280
	ポケット判 『浄土宗寺院名鑑』 本版を携帯用に縮少	A 6 判 364頁	1500	120
	『浄土宗教師必携』 附1977年教師手帳 資格分限ほか取得事項記入欄、主 要宗規宗綱を掲載	A 6 変型判 本草表紙 本体 120 頁 手帳 124 頁	1500 (送料共)	

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 浄土宗宗務支所内
発行所 浄土宗出版事業協会
電話 (03) 436-3351 振替 (東京) 6-62587